『希望の島』

【波の音】

男1「最悪だ」
男2「それを言うなよ。余計最悪な気分になるだろ。」
男1「この状況が最悪じゃないっていたら、何が最悪になるんだよ。乗ってた船が座礁して沈没。次に目が覚めたら、無人島に流れ着いてたなんて・・・。」

【沈黙】

女1「・・・ほら、そんな暗い顔しないでよ！命があっただけラッキーだった訳だし！」
男3「どっかの話であったよね。無人島に流れ着いた人たちが、生き延びるために仲間の肉を食べ始めたんだけど、仲間の一人がそれを拒絶。そいつの事を心配した仲間が人肉のスープをウミガメの・・・」
女1「だぁぁ！黙りなさい！」

【間】

男1「おい・・・。あんなとこに島があるぞ」
男2「は？島なんてどこにも無かっただ・・・島だ。みんな起きろ！島があるぞ！」

【寝ている女2を揺さぶる】

女2「なによ、騒がしいわね。」
男2「それが、近くに島があったんだよ」
女2「幻覚でも見たんじゃない？島が急に現れるわけないでしょ。」
男2「俺も、船の言い間違いだろって思ったけど、ほんとに島があるんだよ！」
女2「はぁ、一体どこにあるっていう・・・ホントじゃない！」
男2「なぁ！」
女1「あの距離なら、泳いで辿りつけるかも！」
男3「無理だよ、僕泳げないし。」
男2「そうか・・・よし！置いていこう。」
男1「おいおい！見捨てる決断が速すぎるだろ！」
男2「そうか？」
男3「大体島があったとして、そこに人がいるかどうかも分からないじゃないか。」
男2「たしかに・・・。よし、置いていこう。」
男1「だから待ってって！はぁ・・・。この島には木は沢山あるようだし、イカダなら作れるんじゃないか？」
女2「木を使うにしたって、ノコギリも何もないのにどうやって木を切るのよ。」

男2「たしかに。」
女1「あぁ、それなら任して！はぁぁぁ、ていや！」

【女1、木をこぶしでなぎ倒す】

男2「前世、蘭姉ちゃんかよ・・・。」
女1「なんか言った？」
男2「いや？」
男1「とにかく、木は手に入りそうだな。他の材料も各自あつめよう。」
女2「そうね。」

【それぞれ作業を始める】

女1「それにしても不思議だよねぇ。」
男2「何が？」
女1「ここに流れ着いたときは、周りには何もなかったのにさ。突然島が現れるなんて。」
男1「霧がかかってたとかで、たまたま見えなかったんだろう。」
女1「ふーん。」
男1「ふぅ。大体こんな感じだな。おい、みんな！イカダが出来たぞ。」
男2「おっしゃ！これでこの島から脱出できるぞ。」
女2「・・・ねぇ、島ってあんなに近かったかしら？」
男1「近かったって、島が動くはずないんだから、同じ場所にあるに決まってんだろ？」
女2「そうよね・・・。私の勘違いだったみたい。」
女1「ねぇ！」
男1「次はどうしたんだ？」
女1「あの島・・・動いてない？」
男1「なに言ってるんだ、島が動くわけないだろ。」
女1「でも、ほら。動いてるんだって！」
男1「疲れて幻覚でも見てるんじゃないのか？」
女1「ホントなんだって！うしろ！」
男1「だから、そんなわけないだろ？島が動くなんて・・・。」

【男1、後ろを振り向く。】
【島の形をした巨大な化け物に怯える】

男1「嘘だろ・・・。」
女2「なによ、この化け物！」
男2「おい！どうすんだよ。」
男1「どうするって、逃げるしかないだろ！」
女1「逃げるってどうやって！」

男2「みんな！とにかくイカダに乗るんだ！」
男3「こ、こ、こんな非現実的なことあるわけないじゃないか。これは、げ、幻覚だ。
幻覚に違いない。」
男2「よし、こいつを生贄にして皆で逃げよう！」
男1「だから、すぐ見捨てるなって！こっちにこい！」

【男1、男3の腕を引っ張る。】

男1「みんな、乗ったか！？」
男2・女1・女2「おう！」「うん！」「えぇ！」
男3「（ぶつぶつ何か言う。）」
男1「よし、行くぞ！」

―終わり―